

マリア・グリーペ『忘れ川をこえた子どもたち』における円環構造

—“忘れ川”を中心として—

要約

スウェーデン語専攻 有園菜希子

本論文はマリア・グリーペ『忘れ川をこえた子どもたち』における“忘れ川”について、この川の持つ機能や役割が、どのように「川」という形態と関連付けられるのかを考察したものである。また、“忘れ川”という物語の中心に位置するモチーフを分析することによって、物語全体の構造や効果を顕かにし、それらがグリーペの作家像とどう繋がっているのかについても考察した。

第一章ではまず、本論文が日本で初めてのグリーペ研究であることを踏まえ、彼女の来歴や作品の特徴を解説し、作品一覧を付記した。第二章では序論として『忘れ川をこえた子どもたち』のあらすじや情報を紹介し、注目すべき点として北欧神話からの引用の多用、現代的なキャラクター像、そして民話的なカタルシスを挙げている。その後、本文の記述から“忘れ川”についてわかることを整理した。第三章から本論に入り、まず“忘れ川”と夢の関係性から、この川がフロイトのいう「無意識」のメタファーなのではないかという論を展開した。また、認知言語学の観点から「無意識」が空間的に把握されるということと、それを満たすものが水であるということを示した。「包む」「流れる」「区切る」という水の性質が、作中での記憶の扱いと合致することについてもここで論じている。続く第四章では、北欧神話のイーヴィングル川とギョッル川が、その形態や役割において“忘れ川”と類似しており、モデルとして考えられるのではないかということ論じた。また、北欧神話全体の円環的な世界観、死と再生という円環的なテーマが、『忘れ川をこえた子どもたち』の世界観やストーリーと地続きであることを述べ、“忘れ川”を堺にした二つの世界が両義性を持っていることについて考察した。

最終第六章では、以上の考察と分析から、“忘れ川”が円という構造を持つことで「無意識」の世界と「北欧神話」の世界とを結びつけており、これは「川」という形態でしか表現できない構造であると結論づけた。“忘れ川”を渡る行為は水面を堺に世界を反転する作業であり、つまりこの川は形態による水平の円環とこの水面を境にした垂直の円環の二つを持っている。これらは北欧神話の円環世界と通じる物語全体の円環的構造と重なり合っている。ここで、“忘れ川”において、個人の「無意識」という内的世界は、「神話」という外的世界と結びつき、お互いに入れ子のような関係を築く。円の持つ閉鎖性、恒常性はこの作品に民話的あるいは童話的な普遍性を与えている。また、「無意識」と「神話」の出会い新しい概念と古い概念の出会いでもあり、グリーペの作品は「新しさ」だけを提示しているわけではなく、古いもの、受け継がれていくものに対する深い眼差しを内包していることができる。グリーペ作品が「現代の古典」とも評される理由は、ここにその一端を覗かせていると言えるだろう。